文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

メディア芸術連携促進事業
連携共同事業

佐藤秀樹第1回インタビュー後半：中学時代からセガ入社まで

清水 洋
金 東勲
鳴原 盛之
山口 翔太郎

IIR Working Paper WP#18-17

2018年2月

Hideki Satoh, Oral History (1st, 2): From Junior High School until Entrance into SEGA

Shimizu, Hiroshi
Kim, Donghoon
Shigihara, Morihiro
Yamaguchi, Shotaro

RCGS
立命館大学ゲーム研究センター
Ritsumeikan Center for Game Studies

Hitotsubashi University
Institute of Innovation Research

GAME

ゲーム産業生成における
イノベーションの分野横断的なオーラル・ヒストリー事業
EMERGENCE of Industry,
An Oral Historical Research Project focusing on Game Industry

佐藤秀樹第１回インタビュー後半：中学時代からセガ入社まで

清水 洋
金 東勲
鴫原 盛之
山口 翔太郎

Hideki Satoh, Oral History (1st, 2): From Junior High School until Entrance into SEGA

Shimizu, Hiroshi
Kim, Donghoon
Shigihara, Morihiro
Yamaguchi, Shotaro

目次

八王子市立第七中学校への転校 3

中学・高校時代の生活 6

大学受験：東京都立工業短期大学に合格 9

大学時代：青年海外協力隊への応募 11

大学時代：就職を決意 13

大学時代：セガを直接訪問 14

開発職としてセガに入社 16

入社当時の業務 18

ピンボールの開発設計に携わる 23

八王子市立第七中学校への転校

Q：はい、それではインタビューの後半を始めます。よろしくお願いします。今度は東京の八王子に来られてから、入社ぐらいまでをお聞きしたいんですけれども、北海道から出てこられるときに何か不安みたいなことはなかったですか。

佐藤：まあ鈍いのか分かんないけど、特段そんな不安はなかったです。いや、これももしかするとその転校、転校で（笑）。

Q：もう転校には慣れてしまったと。

佐藤：うん、そのせいかも分かんないですね。だから、八王子の第七中学校、七中、これは何でかっちゅうと、さっき申し上げた小比企町のすぐそばにある中学校で、そこに入る、そこへ転入したわけですけど。自己紹介で、確かあれね、冬、10 月、11 月、もっとかな。もしかしたら年明けてたかも分からない。そのときに、自己紹介がてら、いや、こっちはあったかいです……いや、東京の人にしてみたらすげえ寒いんだよ、でもあったかいですっていうようなことを言って、それみんな、えー？　なんていう話っていうか。
ほんと北海道の頃は、トイレ行ってズボン下ろすというのはやっぱりすごい寒いから。まあもちろん一晩中火たくときもありました。火は何でたいたのっちったら、製材所やってたんで、勤めてたんで、製材所の切った、何ていうかな、木くずっていうか。

Q：木っ端を持ってきて、それ燃料代わりに。

佐藤：そうです。それだとかあと、切るとほら、ちっちゃな何ていうか、ぬか、ぬかっつうのかな。

Q：おがくずですね。

佐藤：おがくず。あれがいっぱい出るわけです。あれをそれこそでっかいタンクがあって、その下にストーブがあるんですけど、徐々に徐々にそれが燃えてって、それが故に丸一日ずーっと火がついてますよみたいな、そういうことあったんですけど。でもトイレに入っちゃうと、まあ便所に入るともうそれこそ寒い。寒いんで、しゃがむとお尻んとこがぽこっと開くそういう下着があるんですよ、ご存じかどうか分かんない。だから、例えばおしっこのときはいいですけど、うんこするそのときにしゃがむとぱこっとこう、こうやってただ折り返しになってんだ、うん。ね。そうすると、ズボン脱がない。

Q：パンツを脱がないんですか？

佐藤：うん、パンツ脱がなくても、要するにあったかいまんまできる。

一同：(笑)

佐藤：それくらいやっぱり寒かったんだよね。だから俗に言う、そのメリヤス。で、もちろん何ていうんでしょう、上も下も防寒ということでいくと。それが東京に出てきました。あら、だもんね、北海道の寒さに比べるとあったかいね、こっちはあったかいですっつって言ったら、おまえばかじゃねえかぐらいのあれでね。

学校入って、やっぱりさっき申し上げたように、誰か 1 人 2 人とちょっと話しかけてくれるやつがいて。あれで、私にちょっとクイズ出すっていって、北の京と書いて何と読むと。あ、北京（ぺきん）だな。南の京と書いて何と読むと。南京（なんきん）かなと。じゃあ東の京と書いて何と読む、ね。では東京（とうきん）？　ちゃう、東京（とうきょう）だよね（笑)。だから東京っつったら、何だおまえは、今の面白くねえみたいな。
それでまあボケ狙いだったら、もしかしたら東京（とうきん）なのも言っときゃそりゃ良かったかなぐらいの。で、まああんまり中学校、まあそれなりにこっちも、まあばかにしてるっていうかな、それもあったんか分かんないけど、そんなに違和感なくすーっと入ってって。ただあれですね、言葉で方言ってやつだね。北海道では、ものを交換するのを「ばくる」って言うんですよ。

Q：「ばくる」って言うんですか。

佐藤：うん。じゃあこれとそっちのやつばくってよって言うと、交換しようみたいなね。で、とあるとき、ばくるってみたいなそういう言葉使ったら、何じゃそりゃあみたいなってなっちゃうとか。

あとはご存じでしょうけど、鍵を掛けるっていうのは「じょっぴんかる」とかね。あと、何か疲れると「こわい」とかね、そういうのつらっと言うと、何じゃそりゃあみたいなことで、それはそれで 1 つの話題になったんでしょうけどね。ああ、今日こわいなっつっても、疲れたなみたいなそういう意味なんですけど。あとは「何も」とか、よく。せいぜいそんなもんで、あとはまあイントネーション含めてそれほど大きなあれはない、違いはね。ただ何人かは、そうだな、あだ名は田吾作って付けられたよね、うん、田吾作っつってね。要はまあ田舎もんっていうかな、それで。さして、そんなに嫌な思いは全然してなくてね。それで同じ団地に 1 人かわいい女の子がいて。ほんで棟は離れてる。あそこで、5 つぐらいあったのかな。そのうちのとある棟に住んでる女の子で。ちっちゃくて黒くてさ、かわいくて、結構評判の子でね。で、何かで席が隣になったんかな。ほれで昔は日直という、今もあるだろうけど。

Q：はい、ありますね。

佐藤：で、2 人残るわけだ、日直はね。2 人っていうのは何でかっていうと、まあ席が一緒の、男の子、男と、男の子と女の子がこう残ってみたいな。そうすっと、このかわいい女の子なもんだから、やっぱりファンが何人もいて。あれで、こっちは何ていうことはないんだよ。まあかわいいとは思ってたよ、思ってたけど、それほどじゃないんだけど。呼び出されて、ね、難癖つけられて（笑）。顔は殴られなかったけど、何かこう腹の辺りをばーんと殴られてね。大して痛くなかったけど、いててててとか言ってうまくごまかして、ぐらいのやつがあったけど。いや、その女の子とな、ほんと 20 歳んときかな、ばったり会ってね。今だったらもうちょっと。うーん。いや、それでちょっと余談だけど、飲みに行って、で、喫茶店入って、深夜喫茶へ入って、それでさよなら。駄目だなあ。

一同：（笑）

佐藤：当時はほんと、うぶだったしね。まあ短大、私、短大なんだけど、まあちょっといっちゃっていいか分かんないけど、4 畳半を 2 人で住んでたんです。私はもう、ちょっとほら、遠くから学校までっていうことで 1 時間半、帰りは 2 時間ぐらいかかってたんかな。で、ちょっとたまらんのでそいつに頼んで同居、アパートの 1 室に同居させてもらってっていうことでやってたんで。あれ、もし 1 人で住んでたら、うーん、ちょっと（笑）、さっきのあれに挑戦とかいって。俺の人生変わってたか分からんね。（笑）。ま、いうことで、まだ中学校ので、もとより今度は入試っていう、高校っていうことで。私は確か八王子にある富士森高等学校かな、そこを受験したんです。

この地区では立川高校、国立高校か武蔵かな、何かまあ一流どこっていうのかな、などとてもじゃない、入れるだけの頭もないから。ほいで富士森高校を受験して、それ落ちてんだわ。で、たまたまそのときに、そのときは学校群制度がない時代で、日野高校がちょうど新設高校として募集してた。富士森落ちて、それで何でか分かんないけど日野高校へ行くということなって。日野高校ってのはあそこにあるんですよ、高幡不動の近く。まさしく新設高校なもんだから校舎ないんですよ。プレハブ。1 年目はプレハブで。

Q：都立日野高校ですか？

佐藤：そうそう、都立日野高校。で、最初から、もちろん後の短大のもそうなんですけど、金がないの、やっぱり（笑）。もう貧乏はずっと貧乏なんだよ、多分ね。私立なんていうのは全く、うん、考えられない。要するに公立の高校っていうことで、これで都立一本。当時は第 1 志望、第 2 志望、第 3 志望ぐらいまで何かあったんでないかな。先生が日野高校

って書いたのかも分かんない、その第 2 志望で。

富士森高校落ちて日野高校行きました、はいプレハブです。で、プレハブの中で 1 年間過ごして、新しい校舎ができましたっていうことで、それでまあ移ることになったんだけど。だから第 1 期生です、私は。第 1 期生。ほいでね、後で聞いたところでは、芸能人で誰かが出たとか出ないとかでね。まあ出たっていうか。

中学・高校時代の生活

Q：中学時代はどういう中学校生活を送ってらっしゃいますか。

佐藤：中学時代はね……何やってたんだろうね。あの周り、もちろんあれ中学校ですから地元のあれでしょ。でね、寺やってるやつがいたんだわ、お寺やってる。まあ今もあるかどうか分かんないですけども。そこに、同級生でオカっていうやつがいて、そいつんちはよく行ってたな、何か知らないけど。そのときに、そいつの兄貴かな、オートバイのナナハンか何か乗っててね。あいつボスだったんじゃないかな、そうかも。ナナハンがちょうどあれじゃないかな、はやってるっていうかな、ホンダのナナハンつったら、当時としても画期的なあれで。そいつのとこ行ったり。あとは……あと大した記憶ないんだよな。ぶっさいくな女の子がいて、そこんちに遊びに行ったり何とか。母上って呼ぶ女の子でさ（笑）。

Q：部活で例えば文系ので、例えばあの物理部みたい、何かこう、機械をいじるようなサークルみたいなものに入っていたりとかは。

佐藤：あれは、ああ、そういう意味でいくと、あれ高校かな……あ、高校だと思うね。高校が物理部なんだよ。

Q：あ、そうなんですか。

佐藤：で、つまんない嘘発見器とかね、何か作って。学園祭っていうかな、そのときにつらっとまあブース出して何かやったっていう。

Q：よく読んでた例えば雑誌とか漫画とかは？

佐藤：私は中学校、高校入ってからかな、急に読書家なりました。さっきも申し上げたけど、名作と呼ばれるもの。それこそトルストイから始まってエトセトラ、エトセトラ、ディケンズだ何だらかんだら。何かの感想文で私、書いたことあるんですけど、カフカで混乱しディケンズで心躍らせとか、何とかかんとか、くらい読みましたよ。

その、ほんとに一部。ソルジェニーツィンか何かの「魔の山」か何かを読んで、その中

のフレーズでね、要するに絶対時間と相対時間みたいなくだりであるんですけども。思い出が詰まってる、これが苦労であったり喜びであったり何でも。そうすると、特に喜びの場合は何か時間がすぐ過ぎちゃう。ということで時間が非常に短く感じる。ところがこれが5年、10年、20年たつと思い出が残ってる。そうするとそこの時間が残ってるわけです。無為無策にだらだらやってると何にも思い出ないから、その時間なくなっちゃってる。だから絶対時間と相対時間。だから絶対時間がよしんば一緒でも、何年か後には相対時間として見ると全然違う、みたいなことで。確かソルジェニーツィンだと思ったけど。まあそれ、ロシアの作家だよね。その「魔の山」っていうその中に。そこは確か肺結核か何かの隔離病棟の何かなんだわ。で、そういったフレーズあって。今でもだから鮮明に残ってる。だけどストーリー全部忘れちゃいました。

あと日本の作家でいくと、それこそ星新一から始まってあの手のもの。私の読み方は、誰かの本読んで面白いとなったらその人のやつ、ばーっと読むんです。大体読み切ったら、誰か他の。だから遠藤周作ですったら遠藤周作だーっと読んで、高橋和巳ですったらだっと読んでとか、そういう読み方なんで。本だけいっぱい読みましたよね。読んだけど、大半のものはもう何にも。肥やしにもなってるのかどうかも分かんない（笑）。

Q：何かきっかけがあったんですか、中学・高校で本を読まれるようになったのは？

佐藤：うんとね……多分、多分だけど、やっぱり受験だ何だかんだで、その、少し読んどかないと。「国語」みたいなやつでちょっと、何か読まないと、読んでたほうがいいんじゃないかなぐらいなそれがきっかけだと思います。
ほんで中学校も入ってしばらくの間はやっぱ全然できなかった、勉強なんていうのは。それが、やっぱり受験みたいなこととなって、まあちょっと頑張り始めたんです。ほしたら、それこそ下から数えたほうがいいのがぐーっとこうきて、それなりのところへいって。それで、ああ、これだったら富士森高校受験できるんじゃないの、ぐらいのそこまでって。まあ結局は落ちたんだけども。

ほんで、何かやっぱきっかけがないと、もう無精もんだから駄目なんだ、きっとね。何かこうないと。それがあれば、よっしゃみたいなことでちょっと頑張る。日々、何ていうかな、精進しますみたいなことはない。だから私はどっちかっていうと出たとこ勝負っていうかな、うん。で、よく人生設計で何年先どうだとかこういうことを目標に、目標なんて置いたことないんですよ。まあなるようにしかならねえやと、ね。だから座右の銘は何ですかみたいなことを聞かれる。駄目で元々みたいな。駄目元みたいな、そういうちょっとどっちかって感覚です。

私は、血液型はＡ型ですと。Ａですって言うと、んなわけないでしょとかいろいろ言われるんだけど、Ａ型はずぼら、私が思うに。ただ、おやじがＯでおふくろがＡ、だからＡＯ。だからまあ変なところはおやじのあれに似てんのかなと。おやじは、さっきも言って

た変だよっつったら何かっていうと、例えばさっき言ってたように請われて行きました、話が違う。ね、向こうの社長が言ったことと違うとなったら、彼は朝社長と例えばすれ違っても、あいさつすらしない。ふーん、ぐらいの。ね。普通は、普通はおはようございますって嫌でも言う。って言わねえんだ、あれは。そうすっとさ、やっぱ人間関係っていうのは鏡だから、したら先方だって何だこのやろうって話になる、で、結局うまくいかないのよ。その後、これまた話違う、だから移るというその連続だったんでねえかなと思うんだけど。だから、もうちょっとそこで愛想というかな、人間関係っていうかな、そういうものを嫌でもおはようございますって言ってりゃ、そんなに私も転校しないで済んだかも分かんねえけど。

でも反面ね、反面、私はできない、そういうことは、うん。やっぱり嫌な奴、まあ上司だったら特に嫌なあれでもさ、やっぱりおはようございます、ぐらいの一言は言うだろうし。だからそういうことを平気で無視できる、ね、いうことは、私ができないもんだから、いや、すげえなと（笑)、思うことあるけど、ばかじゃないかとは思う、ね。だから非常にこう、まあ矛盾してるあれかも分かんねえけど。

まあ富士森落ちて日野高校へ行って、で、日野高校で 2 年目から新しい校舎で。そのときに先生、女性の先生が 2 年生のときかな、うん、2 年生のときだと思う、担任が女性の先生。1 年目は確かノムラさんっていう人だったと思うけど男性で、その人が物理か何かの先生だったんだ、確か。だもんで何か物理部みたいな所へ入ったけど、まあやってることはまあほんとお遊びだよね、お遊びに近い。今考えるとだよ。当時としてはもうちょっと真剣だったか分かんないけど。

で、2 年目、女性の先生で、本来はさっきから申し上げてるように、女性の先生は私としては相性がいいっていうかな、褒めてくれれば伸びる、みたいな。でもその先生は全然褒めてくれなかった。だからそんなに親しくもないし。ほいで当時学校で一番はやってたのが実は卓球なんですよ。卓球っつったってちゃんとしたラケットを持ってやるんじゃなくって、黒板消しの後ろで。机を全部くっつけて。あれで、まあ何かを置いてネット代わりにしてたんだろうけど、で卓球。で、面白いんですよ、やっぱり。

Q：私も、教科書をネット代わりに挟んで卓球やりました。

佐藤：そうそう、そうそう。それでね、学校が終わってしばらくの間それで遊んでる。それがまあ何日もそういうことが続くと、その女の先生は、あ、佐藤君は家に帰りたくないんだと、ね。家帰ったって、何てことないんだから。で、友達とこうやって遊んでたのがやっぱり面白いから。単純にそれなんだけど、きっと何か理由があるんじゃないということで、親を呼ばれて（笑)、ね。で、何かいろいろヒアリングされたみたい。で、おふくろから、いや、こんなこと言われたよっつって。んなこと、ね、先生は、こっちはただ単純に楽しんでるだけなのに、んなことやられちゃうっていうこと、私も何かその先生と、何

か嫌いなってさ。本来だったら女性の先生で、ああ、秀樹ちゃん秀樹ちゃんぐらいのこと言ってくれてよいしょしてくれると、もっとこう伸び伸びとできたんだろうけど、そうじゃない状況になって。それでまあ 2 年の間はちょっとその先生との間、ぎくしゃくしてたよね。

大学受験：東京都立工業短期大学に合格

佐藤：3 年になったら、今度はまた男の先生で、3 年の時点ではほんともう大学入試いうことだから、まあ基本的にクラス分け、理工、理数系、文化系みたいなあれで。私はやっぱ何かものづくり含めて、やっぱり理数系行きたいなっていうことで理数系入って。ほれで何たって新設校だから、学校としては国公立大学に何名みたいな何か目標を持ってたみたい。ほれで、私はまあそれで大学、やっぱ国公立に入んないことには駄目だからっていうんで、それなりに勉強した。で、それなりにこう上がってって、ほんでね、当時は 1 期・2 期ってあったんです。今はもう 1 期校だ 2 期校だってない、いうことですけど、1 期校・2 期校、これ別々に受けられたんです。で、1 期校は千葉大受けたのかな。2 期校は、えーと、農大、東京農工大学。

Q：府中にある農工大ですか？

佐藤：府中の、うん。受けて、はい、ものの見事にぽんでね（笑）。で、それなりに頑張ったっつったって、家庭教師付けて頑張るわけでもないし、そんな金なんかないんだから、まあ自分で頑張んなさいぐらいなあれで。ほれで両方とも落っこちました。
で、私は予備校はしょうがないからおやじに頼んで予備校に行って。今あるかどうか、新宿予備校ってのがあったんです。新宿予備校もこれ、1 回試験やるんです。試験やって一種クラス分けするんだろうね。ほいでね、まあそこそこ、そこそこで新宿予備校オーケー、オーケーっていうかまあ入学。
　で、ここ 1 年じゃあ予備校かななんて思ってたら、予備校の費用というもの、これ、ばかになんないということで、おやじが都立の短期大学、工業短期大学。昔は鮫洲っていう所にあって、今は 4 年制に変わって東京、あそこ、豊田にあるんだけど。えっとね、科学技術大学かな、何かそんな感じの、うん。昔は今申し上げたように鮫洲に東京都立工業短期大学という名前であって。それで、お前、そこ受けてみないかみたいなことを。
彼にしてみると、おやじにしてみると、まあどっかへたたき込みゃあ、それで国公立だったら金がっていう思いもあったのかも分かんない。ほいでそこ、うん、そうだなと思って、受けて。私の腹は、まあここで学校行きながら勉強して、来年また大学受け直せばええかぐらいの。
　そいでまあ受けました。そしたところ、まあ合格しましたと。要はレベルがそんなに高くないせいもあるんだろうけど、まあまあの成績だったみたいです。何でかっつったら、

奨学金を私は申請したんです。高校のときも奨学金もらってた。それはおやじがもらえるみたいなことで。まず収入は全然問題ないから（笑)、低いところでへばり付いてるから問題ない。日野高へ入った時点の成績もまあまあだったんでしょう。当時 1500 円かな、月、高校はね。短大が 5000 円。5000 円あれば学費から何から全部賄って、私んとこへ小遣いが残るぐらいの金額。当時学費が多分2000円とかそんなもんじゃないの、都立だったから。ここはまた後でセガへ入るときにちょっと役に立ったんだけど。

ほいで、まあこちらの思いとしてみると、さっき言ったようにまあ短大入って、それで奨学金もらうならもらって、勉強して、で、4 年制の大学やればいいやぐらいの。ところがね、人間ね、そこへ入りました、いうことんなって、まあそれなりにカリキュラム。で、カリキュラムがめちゃくちゃきつかった、ここ。何でかっていうと、4 年制の大学になるんだっていうことを目指していた、いうことで、当時でね……何単位だったかな、140 単位ぐらい何か、うん、何となく、ちょっと覚えてないけど。普通の短大だったらまあ例えば 100 なら 100。にもかかわらず、ここはすごい単位数いっぱい。要するにいっぱい勉強させる。これを実績にして今度 4 年制へっていうそういう思いがあったんだろうけど、まあめちゃくちゃきつい。まあきついったて手抜くのはいくらでも手は抜けるんだけど。そういう短大に入りました。

それでそれなりに、今度は転校生じゃないからみんな一緒にいうことで、そん中でまあ友人ができ何ができ。そうするとさ、ね、勉強して（笑)、4 年制受け直す？　めんどくさくなってくるんでね、あれね。で、それでまあ唯々諾々とまあマージャンやったり何やったりかにやったり女の子引っ掛けに戸塚女子短へ行ってとかして。

Q：(笑)

佐藤：戸塚の女の子は結構かわいい子が多くて。1 人……3 人で行ったんかな、3 人くらいでそこへ、学園祭行って、ほんでちょっと知り合いになって。あ、向こうから来たんでこっちで知り合いになったんかどうか忘れたけど、行って。ほんで、まあいいかげんだよな、よくあんなことできたと思うんだけど。占いのやってる一種のブースみたいとこあって。ほんで私、何にも知らないよ、何にも知らないけど、じゃあ私が占うっつってね。で、来る客なんてのはもうそれこそ学生連中の、特に女の子。10 円玉を 5 枚ぐらい出して、好きに並べてくださいと。したら並べるよね。その間ずっとその彼女とずっと話ししながらとかやってる。ほうすっと大体、大体分かるんだ。あ、この子おとなしい子だなとかね。おとなしいが故に今こういう悩みあるんじゃねえか、みたいな。何かこう置いて。そしたらね、知ったかぶりして、まあ能書きいろいろ垂れながら、あんたはこういうところでちょっとあれだからこうしたほうがいいと思うよとか、ね。それをその知り合いの女の子なんかがこう横目で見てると、何かかっこ良く見えるらしい（笑)。で、そのうちの 1 人とちょっとお付き合いをして。最終的には振られたんだけどね。

Q：すいません、あと確認になりますけど、都立短大の鮫洲って、羽田のそばにある鮫洲ですよね、京急沿いの。

佐藤：そうそう、そうそう。鮫洲ね。

Q：分かりました。

大学時代：青年海外協力隊への応募

佐藤：ほいで、まあもう 2 年たって、いうことですけど、私は就職のほう全然考えてなかったんです。何でかっていうと、その当時私のアパートのそばにとある人がいて、その人が海外青年協力隊、これでアメリカへ 2 年かな、3 年間ぐらい行ってて、その話をちらっと聞く機会があったんです。そうすると、ええと、アメリカでは運転免許取るのにそれこそ筆記試験だけでまあ非常に簡単に取れると。この免許は日本へ持ってきて日本の免許にいくらでも切り替えられるとか。何も普通自動車だけじゃなくて、どんとおっきなもの、その、トラックだ何だかんだの、向こうである意味じゃ非常に簡単に取れる。こういうの持ってきてっていうことやると。まあそれ以外にもちろん向こうでいろいろ生活をする、そん中でまあ、あれ、国かな、国からの派遣、いうことで、まあアメリカの生活がエンジョイできる。

私は短大のときに ESS っていう、イングリッシュ・スピーキング・ソサエティーって何かそういう、何だクラブみたいのがあったんです。そこへその友達と一緒に一応入って。何がしたかったかというと、外人とちょっとコミュニケーションっちゅうかな、話ししたいなみたいな、いうことで、そこへ入って。ほんで、3 人でユースホステルなんかに泊まっていると、外人の連中がいっぱい泊まってんだわ、ユースホステル。そこでカナダから来た女の子 3 人、今考えるとかわいい子がいっぱいだったな。ほんと、うん、その子なんかと知り合いになって、それで東京ちょっと、東京ったって、まあちょろっと案内するくらいなもんですけど。

そんときの英語のやりとりで一番今記憶残ってるのが、確か夏ぐらいだったんで「クーラー」っていう言葉。うちにはクーラーがないんだみたいな、何かでクーラーっていう言葉がちょっと通じないんだよ、クーラーって。今だったらエアーコンディショナーであれだけど、クール、クーラー、クーレスト、ね。だからそういったその、全然通じないというようなその思いもしたんで、よっしゃ、これだったら海外青年協力隊でアメリカ行こうと。

ほんで、協力隊で募集してたのは百姓なんです、たまたま。百姓。こっちは百姓やったことない。だもんでね……埼玉県の海外青年協力隊の募集があるっていうんで。私、住所をそのときの同級生の埼玉に住んでるやついたんでそこに移して、そいで行ったの。

ほいで、まず学科、これは何ていうことはない。多分通ったと思う、楽々。それから会話、英語でちょろっとやる。それもまあ ESS っていうけど、まあそれこそあれだね、その外人といろいろ話ししてみたいなことで、ま、それなりに通った。ほいで面接。面接んときに、とんでもないしくじりやってんだよね。面接官から試験どうでした、みたいなこと聞かれて、やっぱ自分の意見をきちっと言わんと駄目だなと。で、まあ向こうも、かちんときたんだろうけど、あの試験問題がなっとらん、みたいな。

一同：(笑)

佐藤：何でかっつうとさ、キャベツって書けとか。キャベツを英語で書けみたいな。要するに百姓のあれだから当たり前っちゃ当たり前なんだわ。それだとかね、何か要するに問題として見ると、百姓やるんです、ファーマーやるんですっていうんだったら、まあある意味当たり前なことかも分かんないけど、こっちはそれこそ電気系を、ね。要するに私は鮫洲で工業短期大学の電気科に入ってるから、そっからいくと全く異質。トマト書けとかさ、何かそんなの。で、まずきちっとした意見を言うべきだ、みたいなことでさ、言ったんだ。ここでまずマイナスだよね。

それから 2 つ目に、これ意地悪質問か分かんないけど、あの佐藤君ねと。先方、ホームステイになるよと。ホームステイなったときに、先方の例えば主人っていうかな、その人から何か言われた、もしくは意見が合わなかったら、そのときあなたどうするって。よし、ここはやっぱね、自立してきちっと、いや、それは徹底的に議論をしてねってなことを言ったわけだよね。それのほうが何かいい、いいんじゃないかなぐらいのあれで。今考えるとばかだなと思うんだけど。そのときは、こっちは経験ないんだから、その意見も拝聴して、とか何とか言やいいんだ、これ。いや、自分の意見をきちっと言って、で、議論したいみたいな。

そんでまあ終わって。そのときは全然気が付かなかった、そんな、いいこと言ったんか悪いこと言ったんかね。まあ自分を出せたかなとかいような感じでさ。ほんで帰ってきて、待てど暮らせど来ない、連絡が来ないだよね。で、しょうがないから電話した。そしたら、いや、佐藤さんねと、あなた不合格ですと。で、こっちはほら、学科試験もそれからカンバセーションの試験もそつなくこなしてもう大丈夫だ、ぐらいの。面接だってきちっと自分をアピールできたしいいな、自信あったからさ。えっ何でって、何でですかって聞いたら、いや、面接のときに何かあったんじゃないんですかぐらいのことを言われて、駄目になっちゃった。

ほれでこんちくしょうと思って、じゃあ東京都はどうなんだっつって、東京都。したらちょうど募集がその後すぐぐらいに募集があるっつうんで、埼玉に籍移したやつこっち持ってきてまた東京に、住所変更のあれやって。で、都庁行って、ほいでその海外青年協力隊ちょっと応募したいくらいのこと言って。ほしたらその担当官に、今何やってんのっち

ゅって聞かれて、いや、梨園を。ちょうど梨園をやってるやつが友達にいたんで。おい、と、マツムラっていうんだけど、マツムラよと、俺がちょっと働いてることにしといてくれと。バイトでちょっと手伝ってるとか、ちょっとしといてくれよっつって。ほれで、まあそのつもりで行きました、はい担当官から、ああ、梨園ねと。どこでやってんのって、あれどこだろうなと思って、まあ府中です、みたいなあれで。ほれで、じゃあ広さどのぐらいあんのって聞かれてさ。答えられないよね（笑）。じゃあ何、何アールあるのって。いや、分かんないからね、ちょっと立って、あのぐらいの広さですとか言って。これで通るっていうか、そんなもん駄目に決まってるよね。何だこの野郎と、この野郎は冷やかしなのか、もしくはただ行きたいがためになのか、いうことで、東京都も駄目。

大学時代：就職を決意

佐藤：そんなこんなしてるうちに、短大時代の連中とたまに会おうっちゅうことで、もうそんときはもう基本的に一応卒業して終わってるってことで。ほれで何か話してたら、俺 4 月から……いや、みんなで就職の話が出てくる。進路の話が出てきて、いや、今度俺はトリオ行くんだとか、富士通行くやつもいりゃあカシオ行くやつもいて、何かまあ電気系だから、そういう話しして。えっ、何だみんな就職するのかみたいな。当たり前っちゅうんだけど。ほれで、これはちょっと俺も考えなくちゃいけねえなと。

ほいでね、学校行ったんですよ。それ、行ったのは確か 3 月の 25 日とか 26 日ぐらい。学校行って、就職担当の先生がいたんで、いや、ご無沙汰してますぐらいから始まって、いや、ちょっと先生、就職したいんですけど、ちょっと、ね、3 月の二十何日にね。おまえは就職しねえって言ったじゃないかと。それは、私は海外青年協力隊でアメリカ行くつもりだったから、そんなの関係ねえっつうぐらいのあれで。ほんで先生が、まあしょうがないなっていうことで、フジソクっていうスイッチだとかコンセントだとかやってる、そこの会社を紹介してくれて。ここだったら俺の顔が利いて、もしかしたら入れてくれるかも分からんと言ったんです。

だけどさ、スイッチカチッとやったら電気が通る？　挿したら電気が流れる？　先生、それつまんねえっつったんだよ、俺。先生、それはちょっと面白くないと、つまんないよと言ったら、先生怒っちゃって。おまえ、今ごろ来て、俺が何とかちょっと顔が利くっていうかな、それんとこ紹介してるのに、もう知らんと。で、2 階かどっかに何か就職のちゃんとした資料が全部置いてある部屋がある……私、1 回も行ったことないのよ、そこ行って自分で探せ、みたいなこと言われて。

しょうがねえなあ、はあっつって、そこ行って。それでまあ、初めて入った所で。いっぱい確かに資料あったわ。で、どんな仕事って何にも決めてないから、つらつらこう見てたらあのトミーが出てきたんだ、おもちゃの。トミーの会社案内か何かで、それでトミーでおもちゃいっぱいやってて、こっちはプラモデル嫌いじゃないぐらいのあれでやってたから。ほれでトミー、あ、トミー面白そうだなと。これだったらスイッチだとかコンセン

トよりはいいやと思いまして、ほれでトミーへ電話した。そしたら、締め切ってますってわけよ。3 月、まだ 4 月入ってねえじゃねえかと。いや、就職活動って一切やってないから、私は。全く分かんないわけよ。だから 3 月の、まだ 4 月前なのに締め切ってる？　とんでもねえなっつって。

　でね、実はこの話をかなりたってからトミーの社長、富山さんっちゅうんだけど、富山さんに俺話した。富山さん、と。私ね、トミー入ろうと思って電話したと。ほしたら、もう締め切ってるって断られたんですよと言ったら。富山さん、まさか 3 月だって思ってない、それは申し訳ないことしたと。

一同：(笑)

佐藤：私もまあそう言われるとあれなんで、まあ 3 月の後半になって言ったんで、ちょっとその辺やっぱり問題あったんですかね、みたいなこと言ったら、えっ？　って。それはさすがに駄目だよなんて言われたことだったんですけど。まあトミーが出てきたんだけども、電話して、そしたらもう締め切ってる。とんでもねえなと。ね？

大学時代：セガを直接訪問

佐藤：で、しょうがねえと他探して。そしたらセガが出てきたのよ。で、セガに、ぱっと開いてみた。ほうするとまあおもちゃじゃないんだけれど、当時スロットマシンだとか、業務用のゲーム機のちょっとはしりのやつ、あとジュークボックスだとかなんかやってて。で、何と金曜日は半ドンですと、土日休みですと。当時は外資だから。

　給料が当時 3 万 2000 円かな、うん、くらいのもんで、決して悪くないんです。で、場所見てみたら大鳥居ですと。片や私が探してるのは鮫洲。鮫洲から大鳥居行くには蒲田で乗り換えて 2 つ目、非常に近い。だから、これな、また電話すると、きっと締め切ってるとか、何かかんか言われる可能性があるなと。これはもう行くしかないなといって、その足でセガへ行った。

　そうしたら、そっからが幸い、私のラッキーなところあるんでしょうけど。まず 3 月 25 日過ぎたら人事はもうやることないんです。入社式、これを準備するぐらいなことで。もうリクルートから何から全部終わって、もう社員、新入社員のあれも終わって、あれちょうど端境期、暇なとき。そのときに、ばかが 1 人来ました。ほれで人事に会わしてくれみたいな。ほれで当時、そのときの課長、これが、彼が何と都立大出身なんだと。で、彼がまあ暇を持て余したかどうか分かんないけど、彼が対応してくれた、人事課長がね。対応してくれて、いや、私ね、都立の短大の佐藤で、ちょっと就職したいと思うんだけども、みたいな。したら、まあ同じ都立だから少しはあれじゃないかな、思うとこあって。ほいで、生意気にも私は、会社ちょっとすいません、案内してくださいと。
ほいでね、で、彼、暇だったんだろうけど全部案内してくれた。当時はそこに工場もあっ

て、ゲーム機をしこしこ作ってた。それからリペアする部門があったり、営業の部隊があって。あれで、ジュークボックス。当時はジュークボックス、もうセガがドミナントしてた。セガにいろんなその歌手が、やっぱ来るんですよ、レコードを置いてくださいと、入れてくださいと。すごいプロモーションなるわけです。

でね、通ってる最中に、もう自殺しちゃったあの藤圭子が通り過ぎる。ほうすっと、何かぺこっとこう頭下げて、あ、藤圭子だなんて思いながらね。で、もうすごい一流どころの歌手がやっぱり来て何とかそのジュークボックスのレコードの中に自分の曲を、新曲であればあるほど入れてほしい。そういったそのレコードが置いてある、10 万枚以上レコードが入ってるような部屋、案内してくれたり。何だかんだで 30 分以上かな。

まあそれで開発、それから生産技術。開発は工作室があって、こちら側がリサーチャーの部屋っていうことで、まあ大したキーワードじゃないけどボタン何個か押したらブションと開いて、ここにリサーチャーが何々でありますというような部屋。こっちはもちろん入れてもらえない。その工作室辺りぶらっと見て、それで生産技術部。生産技術部ってのは、実際開発が開発したものを、今度量産するに当たって図面を描いたりとか検証したりとかする、そういう部門です。そこを案内してもらって、工場も見て、戻って。

で、どうですかって聞かれたんで。いや、私はね、開発か生産技術部だったら入ってもいいと（笑)。あとはもう、そんな工場なんか入ったって、ねじ締めだ何だかんだやこんなもん入りたくないと。開発か生産技術部だって言ったら、今度は 2 つ目のラッキーは、開発は 3 名を募集してましたと。また 2 名しか来なかったと。当時セガは全然人気ないから、セガなんて誰も知らない。で、1 名欠員。いうことで、じゃあちょっとあんた開発興味あるんだったら、開発へ行ってちょっと話ししてらっしゃいということで。開発の当時の部長と次長が面接ですよ。

Q：飛び込みでいきなり面接ですか。すごいですね。

佐藤：そこで、何だかんだでこう話しして、ほれで、まあレーザーがどうだこうだと向こう、何か振ってきたんだよね。で、よく分かんないけどまあ口から出まかせで何か言って。で、先方からね、佐藤君、もしここへ入ってもらったとして、最初からあんな開発じゃないよ。要は、最初はまあ一種作業員っていうかな。だから鉄板曲げたりとか穴開けたりとか、木工のこで切ったり削ったりとか、そういうことだよと。それはどうなのって言うから。いや、それ嫌いじゃないから、いや、全然問題ありませんと。好きですよと。私、昔からプラモデルが好きでどうたらこうたらとか。ほんで何分かな、15 分ぐらい話したんかな。ほしたら、はい、じゃあ人事戻ってくださいって言われて戻った。

そのときの部長が、まあすごくいい人。それはまあ 3 番目のあれかも分かんないけど。最終的に私も仲人お願いしたんだけどね（笑)。ほれで人事戻りました。ほしたら、向こうから連絡があったんでしょう。1 名欠員のことだし、まあ話してみて大丈夫そうだというこ

とで、ほんで採用。ほんで、あの人事のその担当課長から、今日何か書類持ってきてるのったら、いや、持ってきてないよね、何にもね。たまたま就職の部屋で見つけてセガへもう直接行くよりしょうがないと。成績証明書は？　いや、ありませんと。健康診断受けてる？　って。いや、受けてませんと。

一同：(笑)

佐藤：じゃあもう早めにそれを、ちょっと用意してくださいって言われて、ほれで翌日から成績証明書、また学校行ってもらってきて。でも健康診断は確か保健所かどっかで取らなきゃ駄目だっていうことで、予約が要る。だから、結局全部書類そろったのが、もう 4 月入ってからでしょ、多分。っていうことで、入社試験も何にも私、受けてないの。

で、バーバルに、ほんとに口頭でああでもないこうでもないっちゅって、口から出まかせと (笑)、たまたまの運でセガにぽんと入りました。だから私があるレベルっていうかな、セガにしばらくいて、セガが家庭用のゲームやって、宣伝ばんばんかけて、応募者数何万人。ほれで会社案内ったら何千人も来る。ほれでまあ一種足切り的に試験やって、みたいなことやったら絶対入ってない、入れるわけがない（笑)。

開発職としてセガに入社

佐藤：ほれで、さあ入りました。で、4 月 1 日に入社式やりますと。まあどこでもそうなんだろうけど。ついては羽田東急という、もう今取り壊しちゃってなくなってますけど、そこで入社式やりますと。何時からですよっていうんで、ほいで来てくださいっていうことで、さあ、行きました。受付があります。「学卒者こちら」って書いてあるんだよね。学卒者って言葉知らなかった。で、いや今度ね、受付の人に、今度 4 月から入社するんですけどっつって言ったら、あ、学卒者の方ですね、じゃあ向こうです、みたいなね。それで初めて学校を卒業した人いうことで、ああ、これ学卒者（がくそつしゃ）って読むんかっていうことで。

そのときは 100……150 名ぐらいかな、新入社員って来て。開発が 3 名、生産技術部でやっぱ 4〜5 名かな。その他はゲームセンターの従業員だったり、それからゲーム機を売る販売の人間だったり、もちろん管理部門だったりで、そういう人らを全部入れて 150 名。だから今でもそのときに撮った集合写真のあれ持ってますけど、まあ当たり前の話だけども全員いないよね。で、ある程度、まあ 10 年したら半分ぐらい、いないんじゃないかな。20 年ぐらいしたら、またさらに半分いないとかいうことで。私がセガを離れたのが 2008 年か、その時点ではもう誰もいないぐらいの。でも 1 人か 2 人残ってたかも分かんない、まだ。というのでセガに入って。ほいで、そっから開発ということで。でも開発っつったって、すぐに開発じゃなくて。

で、さっき話ししたその、アパート転がり込みました。私は当時親の実家から、実家っ

ていうといやもうあれですけど、団地ですけど、武蔵村山市にあったんです。武蔵村山市は西武線の玉川上水駅、あそこからバスでおっきな団地、都営の団地があるんだ、そこまで行くか、私はオートバイ乗ってたんだけど、50cc ね。オートバイで玉川上水駅まで行って、そっから西武新宿線乗って高田馬場出て、高田馬場から山手線で今度はずっと品川行って、品川からまた京浜急行乗り換えてという、そういう。で、京浜急行で今度、また今度蒲田着いて、今度は大鳥居行くために空港線乗り換えてみたいな。それやってると、朝 6 時 40 分ぐらいかな、家出んのが。ほれで何とか 8 時半ぎりぎりぐらいまでに着いて。帰りといったら、便があんま良くないから 2 時間以上かかるわけです、そのまま帰ってくると。

でね、さすがね、半年そんな学生生活やってると、もう途中で。まず高田馬場があります、途中に新宿あります、渋谷もあるわね。ここでね、やっぱおっこっちゃうんだ（笑）。で、学校へ行かないでここら辺で友達連中と会うんだけどもね。ほれで帰り考えると、当時で 3 時かな、4 時ぐらいに終わってたんでしょうけど、そっから 2 時間半かけて帰ってる。で、途中でちょっと遊んだりなんかすると、もうたまらんということで、半年後ぐらいに、まあそれなりに半年もたちゃみんなどこに住んでてどうだこうだっていうの大体分かってくる。で、1 人、そんなに仲は良くなかったけども、まあフクシマっていう人間がいて。こいつは地方から出てきて、ほれでアパート借りて住んでると。アパートの場所が雑色という。

Q：羽田に近いところにある雑色ですか。

佐藤：うん、やっぱ京浜急行線の雑色駅。そこにきったないアパートだけど、今考えるとね。それこそ水洗トイレもない、もちろん風呂なんかない、いうような所だけど、4 畳半で住んでると。だからよ、と、俺半分金出すから俺も住まわしてくれと言って、ほれでそいつと一緒に同居して。こいつはね、ほんときれい好きっていうかな、まあある意味じゃ当たり前なんだろうけど、毎朝ちゃんと布団上げるんだよ、押し入れに布団入れて。で、彼がやってるから私もしょうがないね、自分の布団上げて、めんどくせえなって、ほんなもん敷いときゃ敷きっぱなしでどうせ帰ってきて寝るだけなんだからと思うんだけど。ほんで布団しまって。で、しまった後こいつはね、毎日掃除するのよ。ほんとにきれい好きで助かったけどね。でもこいついなかったら、俺、さっきの女の子ともしかしたら掃除してたかもしんない。

一同：(笑)

佐藤：それでね、何だかんだで 1 年半か、ほとんど 1 年半こいつと同居。だけど全然あれが違うんだわ、遊び仲間っていうかその、グループが。こいつはどっちかっていうと真面目なほうのグループで、こっちはどっちかっていうと、ええかげんな、もう自堕落な連中

のグループで。私は自堕落な連中のグループでいろいろこう、さっき言ったようにちょっとナンパしに行ったりとか、何だかんだ。そっちのほうなんで、あんまりその接点なく。ただ土日はまあ顔突き合わして、一緒にいることもたまにはあったけど。あんまりその、最終的に親しくもならないでいた。
ま、1 年半住んで、過ぎて、それで彼はもちろんはどっかへ、実家へ帰ったのかな。帰るっちゅうんで、じゃあそこは私が住み続けるということで、この 4 畳半は自分だけのものとして、それで住んで。

Q：雑色だったらもう近いですからね。もう走って行ける。

佐藤：うん、走ってはどうか分かんないけど。それ以来、だから雑色は 18 歳ぐらいから、18 歳の後半ぐらいから住んでいて。だからあの周り、ずーっと私は住んでたんです。で、会社へ入って、そのアパートで今度 6 畳の部屋が空いたんで、4 畳半から 6 畳に格上げ。ほんでここは取り壊しだっていうことなって、すぐそばのまたアパートへ入って、みたいな。で、西六郷へしばらくいて。その後、結婚を機に南下、南六郷へ移って。で、南六郷から今度、仲六郷へ次行き、そんで仲六郷で子どもが 2 人目できたんで、これはちょっとこの団地じゃしょうがねえな、あ、マンションじゃしょうがねえなって。72 平米しかなかったんで、娘 2 人になっちゃったからじゃあ家でも買うかなっつって、それで家建てて。今度はやっぱ大田区ですけど久が原っていうとこへ。会社は途中から、まあ会社の話が入っちゃってるけど、朝 8 時からの会議ってのが週に 1 回必ずあって、みたいなことなんで、大鳥居からある距離以内みたいなことでこれ選んで、大田区の久が原っていうことでね。だからそのセガに入った動機っていうかな、これはまあほんと、これ以外に。何のあれもない。

入社当時の業務

Q：たまたま資料を見たらセガを見つけて、近場にあったから行ったら、あれよあれよという間に採用されちゃいましたと。

佐藤：だから俺は、目標を持ってどうだこうだじゃなく、もう行き当たりばったりに近い。

Q：今、佐藤さんから直接お聞きしたお話が、手元に資料として用意した本にもまさに同じことが書いてありました。

佐藤：だからあの当時セガにいた連中で、私が入社したときの連中のうちの 1 人が、私が入ったときに、もう既に開発で開発業務をやってた人なんですけど、今も一緒に働いてるんですよ。

Q：ああ、そうですか。

佐藤：うちの会社に来てもらってね。後の話になるかも分かんないんですけど、彼は「ハングオン」という体感ゲームの 1 発目を作った。

Q：もしかして石川さんですか。

佐藤：うん。「ハングオン」ってやつを、そのメカを開発した人間。彼にも来てもらったり、それから「ハングオン」そのもののグラフィックスの基板を設計した人間、これも今うちにいるんですけど、そういう人間だとか。でも全部がもうそのセガ、いうことでね。まあそれはずっと後の話なっちゃいますけど。

まあさっきから言ってるように、セガに入ったいきさつっていうのはかようなことで、もうセガが何にも魅力のない、しょうもない会社。当時ね、当時はみたいな。要するに誰も知らない。ゲーセン行って確かにセガって機械が置いてあったとして、遊んでる人にとってみりゃ、メーカー名はどうでもいいんですよ。タイトーだろうがナムコだろうが。要するに面白いの、面白くないかってそれだけの話だから。まあ誰もそんなもん知らない。

だから当時は 1 ゲームが 20 円とか 30 円、10 円玉放り込んどきゃ。それでゲームそのものも、プロジェクターで光当てて、ここに円盤があって、ここに絵が描いてあって、それがスクリーンに映ります、はい大型ゲームですよみたいな、せいぜいそんなレベルのものだったり。鉄砲でパシャンと打ったらぽろんと倒れる人形がくっついてて、何でかって、ひもを引っ張ってるやつを離すからぺちゃんと倒れるっていう。あのあとだとメダルゲームで、それはプッシャーっていいますけど、今でも売ってますけど、それはあの非常にシンプルな、そういったゲーム。あとはスロット、それからジュークボックス、そんなもんくらいのもんですから、まあ一般の人にとってみるとセガなんて知らない。だから応募も少ない、人気もない、欠員も出て。そこへすぽっと、こうはまった。

でも私にとってみると、確かに穴開けたり、木切ったり、何だらかんだらっていうのは、これは嫌いなことじゃないんで、それはそれで楽しいし、今も生きてます。あのときに、例えばの話、ドリル。ドリルは使ってると切れなくなるのね。じゃあドリルの刃を磨く、研磨する。まあおやじのほうに近いかも分かんない。

Q：同じですよね、目立てですね。

佐藤：そうそう。で、鉄板を切る、曲げる、そういうことは、そこでしばらくの間やって。ほれで、ちょっと会社のあれんなっちゃうけど、昔っていうかそのリサーチャーの部屋、それから作業員みたいなこれをこう分かれていて。で、リサーチャーの人が、こういうゲ

ーム作ろうっていうことでまあ図面描いて、もし板金が必要だったらそれをこの作業をするところのセクションにこの図面を持ってくんです。で、これ作ってと。そうすっと、われわれをマネジしてる人、彼がこうやって見て、お、佐藤暇そうだ、よし、佐藤、はいこれ、ね。で、渡される。ほしたらそれを見て、その図面どおり曲げるもん曲げる、穴開けるもん穴開けて持ってく。で、彼がノギスっていいますけど、寸法をもう 1 回チェックして、良かったらリサーチャーんとこへ、よし、それじゃこれ持ってけ。で、持ってくっていう、そういう仕組みで動いていた。

でね、あるとき私、まあ行き来は、閉めるといっても、んなもんね、社内だから行き来簡単にできる。で、ある人と話してて、たまたま彼、私がそこにいたからなんでしょうけど図面出して、おい、ちょっとこれ作ってくれみたいなことで。で、聞いたんですよ、これ何、どこが一番大事なの？　みたいな。したら、例えばチェーンにあるブラケットをこうくっつける。そのブラケットの上に車載っける、模型の車。で、チェーンを回す。そうすっとこれがくるっと回ってくる。

それをこっちから見てると、車がこう、ね。で、チェーンのほうを動かす。そしてそのときのブラケット、で、チェーンにこうくっつける。チェーンっていうのはここの間隔、きっちり決まってるわけです。ここは大事。これは広いと、狭いと、入らない、いうことだ。ここは大事だと。で、こっちのほう、幅どうなんですかったら、ええやん、ほんなの 2〜3 ミリずれたってと。模型乗っけるだけだからと。ほれで、こっちはどうなんですかったら、いや、隙間あるからこれは 2〜3 ミリぐらいいいやっていうそういうこと聞いて、図面とともに管理する人んとこ行って、こういう仕事受けてきましたと。ならじゃあそれ作れって。

例えば幅 10 センチ。10 センチをきちっとやろうとすると、けがき針できれいにけがいて、そのとおりにバシャンと切ってっていうことが必要。だけどまあここは大体でいいよなって言ってたからっていって、シャッシャッシャッとやって。で、ここだけは大事だって言われたところを、ぴしっとやってっていうことで。そしたら、早いね、仕事がって。手抜いてんだもん。

一同：(笑)

佐藤：決めるとこはここだけだ。あとはまあバシャンと切って、それでぺっとやってバシャンと切ってほんで曲げて、それで持ってく。そうすっと管理する人、彼がこれ見て図面照らして、おいおい、と。これ 10 センチならおまえ、10.5 センチぐらいあるじゃないかと。ここも違うじゃないか、みたいな。これやり直しって言うから、いや、そうじゃないですよっちゅって。いいんですって、ここはと。そう言われましたっちゅって。んなわけねえっちゅって、彼、行きました。で、実際オーダーした人に聞きましたと。ほしたら、いい、当たり前だよね、彼が言って、そんなのどうでもいいんだよ、そんなもんはということで。

ほれで彼、戻ってきて、まあいいって言ってるわということで、それでそれ通った。で、こと細に至って、まあ適当に、大事なとこは、まあ決めるとこは決めなきゃいけないけど、あとはいいかげんなところが、でもいい加減でほんとやればいいんだっていうことで。

したら、ここのマネジしてる人からしてみると、ちょっと腹立つっていうかな。と同時に、この野郎すごい上手だなみたいなことで、この人にもうえらく気に入られたんだ、私。まあ調子いい野郎だ、みたいなことなのかどうか分かんないけど、えらく気に入られて。まあその後の話ですけど、大阪でどでかいジオラマを造る、そこに車と電車、これを走らして、1 回 50 円でそのレーシングカー、これを運転できる、もしくは電車を操縦できるみたいな。実際の模型が走るんです。それ近鉄ビルの中でね、どでかい……何坪あったんかな、100 坪以上あったんじゃないですか。山造ったりトンネル造ったり、線路引いて何やってって。

ってことは、まず基礎から造っていかなきゃいけない。だから、えらく気に入られちゃってるもんだから、ね、私は本来電気なんだよね（笑）。だけど、もうご指名で、おい佐藤行くぞ、みたいなことでまあ連れて行かれて。最初っから、もうそれこそ木、その、何つうんだ、柱。これを何センチに切るってのはもう全部切らして、そこへ持ってくんですけど。それ組み立てから始まって、ずーっとあれで半年ぐらいやってたかな、3 ヶ月ぐらいかな、大阪へずーっと行って。

近鉄ビルで、何たっけ、駅名忘れたけど、まあ近鉄ビルで新装、新しくビルができたんで、ここにアミューズメントゾーンをやっぱ置きたいと。で、その辺のゲームセンターのあれみたいの持ってくんのは嫌だ、みたいなね。ほれでまあセガに何とかしてくれっていうことでそこに造ったんですけども。でもこれは半年ぐらいで撤去って言われてたから。まず 50 円も払ってそんな、やるやつ当時はいない。それとあの HO ゲージだと電車だとするとすぐ接触不良起こすんだわ。線路。確かにきれいに拭いてくださいねって言うんだけど、トンネルの中なんて、んなの拭けやしない。

走ってるうちはいいんですよ、列車でうわーっと動いてるから。でもきちっと閉塞回路っていうやつを作って、この電車がここにいたらここで止まるという、全部これ閉塞回路作って、それでこれが動いたらこっちにこう動けるみたいな。そうすっと、遊んでるほうからしてみると、とろくせえのが 1 人いるとみんな詰まっちゃう。だから面白くない。面白くない上に、1 回止まっちゃうと動かないみたいね、いうようなことで、大した金かけたのはいいけど半年ぐらいでもう駄目っつって、で、取り壊しになって。違うもの何か入れたんでしょうけど。まあ、こと幸いに、すごいかわいがられちゃったが故に、まあそうなって、連れてかれて。

月に 2 回は帰っていいということで、新幹線の回数券くれる。ほんで、とあるやつが、私も最終的にやったんだけども、キセルをやるわけです。ほいでね、回数券で入ります、新幹線乗りました。そうすっと検札来るのが大体決まってんです。そのときに彼は検札を逃げるためにビュッフェに行く。そうするとビュッフェにいる人に対しては検札しない。

今はやってるかどうか分かんない、当時はね、しない。さあ、それで行き過ぎたなと。戻って、はい駅着きました。したらね、ひたすら切符探すんだよ、落ちてるやつ。当時、新幹線も一般も、あの改札ってのはなかったの。新幹線の出口から一般の、要するに路線にこう移るときにない、なかった。だから、すっと、まあ東京駅着きました、降りました、じゃあ次に山手線に乗るんですね。で、そのまんますーっと行って、まあ最終的にはその切符を出す。だけど切符いっぱいおっこってる。キセルやってるやつがいっぱいいるから。

Q：要はその、新幹線降りたときに新幹線用の改札口が今はないわけですね。

佐藤：ない。

Q：そのまま在来線のホームに行けちゃう。

佐藤：そうそう、うん。それを拾う。せいぜい、まあおっこってる切符ぐらいだから近場ですよ。で、まあ何枚かいろいろと、まあ一番いいのこう選ぶなり何なりして。ほんで目的地と違ったってちょっと乗り越しです。ね、当時、まあ時間なんか入ってない。今みたいに Suica で何時に乗りました、どうたらこうたら分かんない。だから乗り越しですったら向こうは、はい、じゃあ 150 円のところ 120 円だから 30 円乗り越しですね。そうすると回数券が丸々浮くんだわ。ね、丸々浮く。入場券で入っちゃうんだから、あんなもんね。して、これを今度は金券ショップに持ってって。

Q：そこで換金しちゃうと…。

佐藤：換金。私は 2 度ほどやってるかな、うん。あるやつは、それ、所帯持ちは毎週のようにでもいいですよ、みたいな。そういうあれだったんで、かなりたまるんですよ。当時から新幹線は結構いい値段で 6000 円、7000 円かな、何か今はもっと高いんでしょうけど、東京大阪間。10 枚もたまりゃ大変なもんです。それで彼、豪語してた。このカメラはね、それで買ったんだとか（笑）。いやあ、なかなか、うん、大したもんって。そういう、何ていうかな、ノウハウ、ね。

　で、いろいろやっぱりそこまでやってくると、さっき言ったように、どこそこ過ぎたら車掌が来る。だったら、ここ過ぎたらビュッフェ行ってビールでも飲んで行き過ぎるのを待って、戻って。その前だとほら、回数券の持ってたら、その回数券パチンってやられちゃう、そうすっと使えないみたいなことなるんで、これはもう新品のまんま。そういうのは多分いっぱいあったんじゃないかな。だから新幹線から在来線のとこにまたゲートを作って、ここで。金額としては半端じゃないからね。まああいつ、若くして死んだからな、罰当たったんだろうな。

ピンボールの開発設計に携わる

Q：入社当時、セガの同期の仲間と、プライベートとか昼休みとかの場でアーケードゲーム会社、ゲームセンターのほう、話題はこう頻繁にするものだったんでしょうか？　皆さんゲームに関心があって会社に入ってきた方が割と多かったと思うんですが。

佐藤：多分、ほとんどしなかったと思う。まあその後の話だけど、私が一番覚えてるっていうかな、面白かったなと思うのは、ピンボール、フリッパーっていう、それの開発設計を任されたんです。何となれば、前はリサーチャー、それからそういった作業する人間っていうこと分けてたけど、もうそれぞれの課にして、そこん中に作業する人間も一緒んなって入って、課単位で動く。で、その課で必要なものは、その課でそこの作業室に行って作るなり何なり。私が配属されたのはそのピンボールの、セガではフリッパーって呼んでましたけど。まああれです、イルカの尻尾みたいな。ボタンを押すとバンってきて、してボールが落ちてきたやつを、跳ね飛ばして落ちないようにするという。それを担当してるその課に配属されて。ほれで当時、制御は全部リレーで。

Q：リレーですよね。

佐藤：電気を入れると、パチンとこう引いて、それで接点がくっつくだの離れるだの。リレー、電磁リレーですね。それで作っていた。電磁リレーの回路ってのは、非常にロジカルで。まあある意味分かるとまあ簡単なんですけども、そのリレーで制御をする。じゃ、ここに入ったらこういう動きして、ほんでタイミング取るためにはまあモーターがこう回って、ほんでここでタイミングを取って、ほんであるアクションを起こしてその、まあイベント終了よ、みたいな。で、カムももう種類が 10 種類ぐらいこれ乗っかってて、1 発ぽんと入ったらカムをウィンと回す、そうすっとそのタイミングで、いろんな処理をしてっていう、そういった仕組みでこう動いている。でもそのタイミングが分かってしまえば、1 番目のカムは、2 番目のカムは、3 番目のカムはいつものときにスイッチが入る、切れるんだなっていうそれが分かると、まあ回路組めるわけです。

　ほれで、回路を作って実際、生産技術部に渡す、量産前に 1 つ試作品を作るわけですよ。ほうすっと、いろんな所にいろんなスイッチなりいろんなそれの。で、いろんな部品が、電気で動く部品があるってことは、ケーブルがもう 200 本とか 300 本になるんです。

Q：私も少しだけですが、ピンボールのメンテナンスをやったことがありましたけど、たくさんの部品を使っているのでとても大変でした。

佐藤：で、試作するときに、さっきも言ってたように例えば 100 本ケーブルがある。すっ

と、ケーブルの色、これが例えば 10 種類あります。
セガの場合は、ケーブルの上にさらに印刷して、ここの、何ちゅうんだろうな、らせんの印刷がしてあって、赤と青とか、緑と白とか、こういうのを作ったんですけど、かぶるわけです。おんなじ色が 3 本なる、5 本なる。さあ、こっからがやっちゃいけないのかも分かんないけど、これはどの線がどこに来てるか、それをテスターで測る。それで、例えば 3 本ぽろんと来てたら、ここに、ここからこう来てる線はどれかテスターで当ててみて。

Q：そうですね。

佐藤：ってやればちゃんと分かるんだけど。で、たまたまその課は私含めて 3 人だったのね。で、例えば 3 本あったら、ここで賭けるんです（笑）。ぐわーって、まとまって来てるからどれがどれだか分かんない。じゃあそのときの課長はこれ、係長これ、私これっちゅって。で、勝つと 10 円。だからね、仕事が楽しい。それで、ためて、それを今度みんな徴収して、それで昼飯。

Q：それは楽しそうですね。

佐藤：あと実際に動き始めてから、やっぱ面白い面白くないっていうのは実際遊んでみないと分かんない。で、遊ぶ。でもただ遊んでるとそれはまた面白くない。だから点数ね、これで賭ける。だから一番点数高い人が 1 点。1 点ってまあ 10 円。で、点数だけじゃやっぱ面白くないと。だからこれ全部足し算する、ね。そいでおいちょかぶで、ね、とか。あとナンバーマッチって昔言ったんですけど、何百何十何点なったら、その下 1 桁が、ある、ここにこれもランダムに動いてるこれと合うと 1 個ボーナスでもう 1 回遊べるよっていうリプレイ。

Q：エクステンドのシステム、確かにありましたね。

佐藤：そういう仕組みになってたんで、ナンバーマッチが当たると 1 点。それを 3 人だけじゃなくって、やっぱり遊んでみないとほんとによく分からんから、みんなでちょっと遊びましょうよと、大義名分にして。当時で 20 名ぐらいいたのかな。参加する人もいるし、参加しない人もいるんだけど。参加する、それだけでもすぐに 7 名とか 8 名になる。で、点数で勝つと、7 点 8 点、70 円 80 円入ってくるわけだ。それでおいちょかぶで、もしかぶでもなろうもんならまた入ってきて。結構、金が動くんだよ、10 円でも。
　で、こちらは、さっきから言ってるように、もう遊んでみないとほんとによく分かんない。確かにそうなんですよ。遊んで、あそこのターゲットにじゃあボールが当たったらこういうアクションを起こそうと。ところがそのボールをそこへこう打つ、要するにフリッ

パーでびゅーんと打ったりする、それがあまりにも難しいとか、あんまりにもやさしいと、やっぱ面白くないにつながってくるんで。じゃあ、これはここに置いてあるけど、もうちょっとこっちへ動かしてずらしたほうがいいんじゃないか、とかとか。そういうのは実際遊んでみて、それでだんだんだんだんよくしてく。それは確かにそのとおりなんで。

で、やっぱそれをいいかげんにやってると、やっぱ面白くなくても、面白くても、まあええやってやっちゃそれまでなんだけど、金かかると。ここに当てたらもうボーナスの得点で 100 点なるとかダブルなるとかいうと、やっぱりみんな真剣にこう、ね。実際自分が金出して遊んでる以上に。そうすると、ちょっとあそこ狙いにくいじゃないかよとか、なかなか当たんないからこれは良くねえと、もうちょっとこっちに持ってきたほうがいいんじゃないのとかね、そういう意見もこう出てくる。それも反映して、ほんとにいいもの作るんです。だからみんなに遊んでもらってんですっていう。

ところがね、んなの先刻ね、当時のその部長だって知ってるわけ。こいつらまた賭けてるなと。

一同：(笑)

佐藤：で、たまに、おめえらええかげんにせえとね、たまに怒るんだけど。

Q：ここにある本に出てくる方ですかね。

佐藤：あ？　高橋。

Q：名前ちょっと読めないんですけど、越智開発部長。

佐藤：それは越智（おち）さん。

Q：越智さんですか。

佐藤：越智さんっていうのはもっと上の人で。開発の部長っていうのが高橋さんって人がいて、その上に越智さんっていう人がいて。この人はちょっと変わった人だったけど。色弱なんだわ。だけど自分で絵描いて、もう頭ん中にたたき込んでるんでしょうね、こういう色で見えるとこの色だな、みたいな。で、アイデア、要するにゲーム、特にテレビゲームはアイデア勝負ですから。そうすっと、こういう画像を出してこういう動きをさせてこういう、まあコンセプトとしては、遊びだみたいなもの。その人がラフに描いて、それをそれぞれの課に振って、それぞれの課でこれを肉付けするなりで実際動くようにするなりしてくんですけど、まあ大変なアイデアマンだったよね。

トラックボールってやつも、彼、買ってきたんだけど。軍事用に使ってた。トラックボールっていうのは、ボールがあって、これでこうやると縦横。まあマウスで今付いてるやつありますけど。それで、それをちょっとおっきくして、ゲーム機の中入れる。そうすっと、くるくるこう回すことで、それまでスイッチが入ってるのが切れるとかいうものではなくって、それでこうやるとかね。それを特許申請して通って。まあ非常に限られたゲーム機において、みたいなな、そういうことですけど、それを特許取得して。で、これのライセンスをナムコにとかね。ライセンスにするだけのそういうその技術っていうかな、アイデア。その人は越智さん、越智止戈之助（しかのすけ）って読む。

Q：その辺の開発の話は、またぜひ次に詳しくお聞きできれば。それでは本日は、ほんとに長い間ありがとうございました。

佐藤：いえいえ。